

新聞記事から現代の課題を知り、自らの意見を考える教育の実践

～NIEを通じて、社会参画意識を向上させ、言語能力の発達を図る～

新潟県立阿賀黎明高等学校

1 学校の概要

阿賀黎明高等学校は、創立 100 年の歴史と伝統を持つ新潟県立津川高等学校を改組・改称し、平成 14 年に県内初、全国で 4 番目の公立併設型中高一貫校としてスタートした。教育方針に、「知性に支えられた創造力の育成」、「感性に支えられた表現力の育成」及び「社会性や忍耐力に支えられた自己管理能力の育成」を掲げ、知・徳・体の調和のとれた人格の形成を図り、社会に貢献しながら、21 世紀をたくましく生きることができる個性的、魅力的な人材の育成を目指している。

教育目標として、「ステップアップで確かな学力」、「自らつくるたくましい心」及び「創造と工夫で拓く未来」を掲げており、中学校における宿泊研修や森林体験、イングリッシュセミナー、高等学校における福祉体験やレガッタ体験など、地域や関係機関と連携した多様な体験活動を通して、生徒の豊かな感性と社会性を育んでいる。

部活動では、ボート部の活動が特に盛んであり、全国大会での上位入賞を目指して熱心に取り組んでいる。本年度はインターハイの男子シングルスカルで全国 4 位に入賞するなど、活動実績も向上している。

昨年度までは、オンリーワンスクール新潟未来プロジェクトの指定校として地域の課題研究や貢献活動を充実させてきた。今年度も、有名な「狐の嫁入り行列」のスタッフとしての参加や阿賀町サポーターズクラブのボランティア活動などを継続して行っている。

進学指導においては、1 クラスを 2 つに分けて行う少人数指導や 2 人の教職員によるティームティーチングを導入し、生徒の学びを支える効果的な授業を実施している。さらに、授業理解をより一層推し進め、大学進学に対応できる学力を身につけることをねらいに進学補習や土曜講習も実施し、生徒の進路志望実現に向けた取組を充実させている。

2 NIE 実践のねらい

本校では、生徒の実態を踏まえて以下の 3 点を実践の狙いとした。

- (1) 日常生活に新聞を取り入れ社会で現在起こっていることについて幅広い関心を持つ
- (2) 自分の関心を引く記事を見つけだし、その記事に関する自分の意見を持つ
- (3) 記事に関する自分の意見を文章や口頭で表現する

(1) については、本校の生徒はスマートフォンを通じてインターネットから情報を得ることが多く、日常的に新聞を読む生徒は少ない。このことから、まず新聞を開いてどんな記事が掲載されているのか見てみるように生徒に促したいと考えた。また、学校の所在地である阿賀町に住み、地元に着実に成長してきた生徒が多いことから、新聞記

事を読むことによってより広い地域単位で現在何が起きているのかに興味・関心を持って欲しいとも考えた。

(2), (3) については、現況の教育現場では様々な場面で言語活動の充実が求められている。NIE を通じて、様々な記事を正しく読みこなす読解力、自分の意見を考える思考力、自分の意見を他者に紹介したり他者を説得したりすることができる表現力を育むことができると考え、実践のねらいに取り入れた。

3 本年度実践の概要

(1) 高校 1 年生の実践

1 学年 朝学習 (10/17・18、10/24・25)

10/17 水曜日課題

ステップ1: 新聞記事を読む

★自分が気になったところ、印象に残ったところにアンダーラインを引こう。

★意味のわからない言葉があったら○で囲み、意味調べてみよう。

(先生に聞いてもよい)

10/24 水曜日課題

ステップ3: この記事について、自分の意見をまとめてみよう。

① 自分は、自分の地元でイオンなどの大きな商業施設ができることに
賛成 反対

② その理由はなぜですか?

③ 大きな商業施設ができるメリットは何かと聞いたら?

④ 大きな商業施設ができるデメリットは何かと聞いたら?

⑤ その他自分の意見があれば、メモ

10/25 木曜日課題

ステップ4: 昨日の①～⑤をもとに、新聞記事に関する自分の意見を文章にしよう。

私は、地元で大きな商業施設をつくることに 賛成 です。

大きな商業施設ができるメリットは、何かが買えるし、にぎやか
いう場所ができて、お金の循環がよくなるです。

一方、デメリットは、お金の流出が止まることです。

私は、メリット・デメリット の方が大きいと考えるため、
(どちらかをよく読む)

地元で大きな商業施設をつくることに 賛成 です。

①新聞記事の読解と意見表現

高校 1 年生は朝学習の機会を利用し、週 2 回新聞を読んで自分の意見を考える課題を行った。9 月～12 月の間に実施し、9 つの記事を取り扱った。課題においては、生徒が意見を考えやすくするために、2 つの逆の意見の投書を読ませて内容を比較させ、経験などに照らし合わせて自分の意見を考え出すという方式や、地元に着した話題を取り上げる工夫を行った。

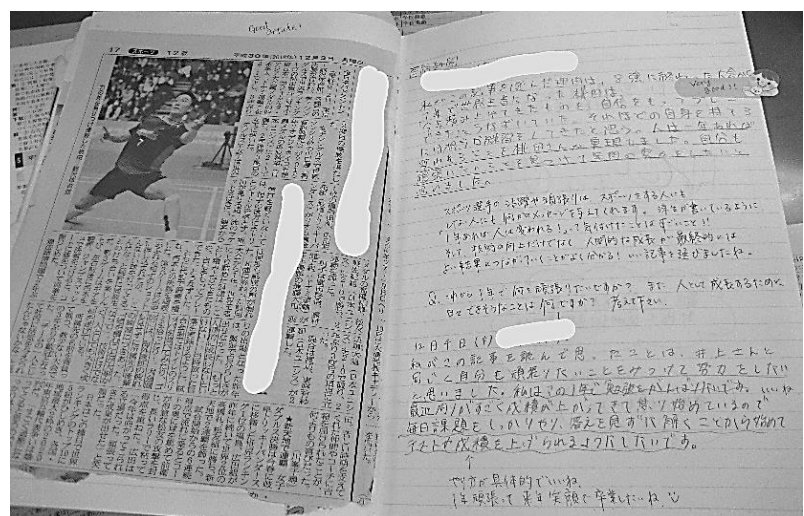
②現代社会における研究授業

高校 1 学年の現代社会において、新聞を読んでマスメディアについて理解を深めるための研究授業を行った。

(2) 高校 2 年生の実践

高校 2 学年は、新聞スクラップリレーを行った。この活動は、NIE 実践の導入前から学年の取組として継続して行われてきた。

活動の方式としては、当番の生徒が好きな新聞記事を選んでそれをノートにスクラップし、自分の意見を 5～6 行書いて担任に提出する。担任がそれを確認し、次の当番の生徒に渡す。生徒は、前の当番の生徒が選んだ記事と意見の感想を書くとともに、自分の好きな記事を選び、意見を記す。この繰り返しによって、スクラップノートが作成されていくという活動である。



(3) 高校 3 年生の実践

高校 3 年生は、新聞スクラップ掲示を行った。活動の方式は、当番の生徒が自分の好きな新聞記事をスクラップし、それに意見を書いて教室に掲示するというものである。



(4) 全学年における実践

高等学校全学年における実践として、今年度は 10 月 30 日に講演会を行った。講演会の講師として芥川賞作家・法政大学教授の藤沢周先生をお招きし、「新聞や本などの活字を「読む」ことについて」というテーマでご講演いただいた。この活動については、高校生だけではなく、阿賀黎明中学校の生徒も参加して実施された。

藤沢先生はかつて図書新聞の編集に携わっていたというご経験もあり、文章を書く力は読むことによって育まれることや、そういった意味で新聞を読むことが非常に大きな経験になることをわかりやすく講演してくださった。



4 実践例

(1) 授業者：教諭 笠原真理子

(2) 対象学年と生徒：普通科高校 1 学年 25 名

(3) 期日：平成 30 年 11 月 14 日（水）

(4) 教科・科目：現代社会

(5) 授業の目標

①新聞から読み取った情報をもとに、新聞の機能とは何か考え、個人・グループの意見をつくりだすことができる。

異なる新聞の記事を比較して読み取り、その違いについて考察する。

②新聞記事の内容を読み取り、その趣旨をまとめることができる。

(6) 授業の展開

時間	学習内容	教師の動き (指導内容)	生徒の動き (活動)	評価の方法と観点 指導上の留意点
導入 (3分)	・ 本時の学習内容の説明	・ 生徒を 6 グループに分けてグループごとに席に着かせる ・ 本時は、新聞記事を使ってマスメディアについて学習することを説明する ・ 生徒にワークシート①を配布する	・ グループごとに分かれて席に座る ・ 教師の説明を聞く	
展開 1 (17分)	・ 新聞の紙面を実際に読み、新聞の果たしている機能にはどんなものがあるか考え、理解する	・ 各グループに新聞のページ一枚を配る。(グループごとに異なる新聞・異なるページを配布) ・ 新聞記事に目を通すように生徒に指示する ・ 各グループで、自分たちが配られた新聞のページがどのような情報を伝えているか調べるよう指示する ・ 各グループの調査結果を発表させる ・ 各グループの調査結果を黒板に板書し、似た情報ごとに分類する ・ 新聞の果たす機能についてまとめ、説明する	・ 新聞記事を読む ・ 新聞にはどのような情報が載っているかグループで調べ、書き出す ・ 代表者が調べた結果を発表する ・ 新聞の果たす機能について説明を聞き、板書を写す	・ 各新聞のページのポイントとなりそうな場所にはあらかじめマーカーで線を引き、生徒にヒントを与えておく ・ 机間巡視し、議論が進まないグループの補助を行う 評価 ワークシート①に内容をまとめられた 評価 代表者が自分達の調査結果を発表できた
展開 2 (23分)	・ グループワークを通じて、マスメディアの中での新聞の特質について読み取りを行う。 ・ それぞれのマスメディアの特質	・ 各グループに、10月16日の朝日新聞・読売に掲載されていた「消費税増税に関する社説」を配布する 教室前方の3班には朝日新聞、後方の3班には読売新聞を配布する ・ 生徒に新聞記事を読ませ、ワークシート②を各グループに2枚配布し、それに沿って内容をまとめるように指示する	・ 新聞記事を読み、その内容をワークシート②に沿ってまとめる	・ 各新聞記事のポイントとなりそうな場所にはあらかじめマーカーで線をひき、生徒にヒントを与えておく ・ 机間巡視し、まとめが進まないグループの補助を行う

	をとらえ、 場合に 応じて 使い分 けがで きるよ う理解 を深め る。	・生徒がワークシート②に記事をもとめ終わったら、グループの代表者にワークシート②1枚を持たせ、別のグループに行き、自分のまとめた内容を発表するよう指示する (前方のグループは後方へ、後方のグループは前方へ) ・生徒に自分のグループと他のグループのまとめた内容がどのように違っていたか発問する ・前方のグループに読売新聞、後方のグループに朝日新聞を配布し、記事の違いを確認させる。 ・生徒の回答から、新聞社は自分達の意見を紙面に自由に書くことができること、それによって各社の報道する内容にも変化があることを示す ・その他のマスメディアであるテレビ・インターネットの特徴について簡単にまとめ、それぞれのマスメディアの特性を理解して使い分ける必要性を示す	・代表者は別のグループに行き、自分のグループがまとめた内容を発表する ・代表者以外の生徒は、別のグループの代表者の発表を聞き、自分の班の内容と比較する ・教師の発問に答える ・最初に配られた新聞記事と今配られた新聞記事の内容の違いを確認する。 ・各マスメディアについて説明を聞き、板書を写す	- 評価 ワークシート②に内容をまとめた - 評価 代表者が自分達のグループでまとめた内容を発表できた ・代表者以外の生徒は発表をきちんと聞いていた - 評価 教師の発問に適切に回答できた
まとめ (4分)	・本時の授業の振り返り まとめ	・本時の内容をまとめる ・ワークシートに感想を書くように指示する	・まとめの説明を聞く ・ワークシート①に本時の感想を書く	・評価 ワークシート①に感想を書けた

(7) 研究協議会での指導

研究協議会では、新潟大学創生学部准教授田中一裕先生を講師として指導・助言をいただき、他の参加者と意見交換が行われた。

授業全体としては、生徒は学習活動に興味を持ち、1時間の授業に積極的に取り組んでいた。生徒が新聞の様々な情報を調べる活動では、どんな記事が載っているのか細かな部分まで生徒が興味深く新聞を調べており、内容の発表もスムーズに進めることができた。社説の比較については、小学生・中学生は内容の違いになかなか気づくことができないが、高校生はその違いに自ら気づくことができていたという点で、発達段階に適した題材であったという評価をいただいた。

また、授業の進め方について、生徒がより内容を把握しやすくするために指示をわかりやすくしたほうがよい、社説の違いを黒板に書いて視覚化すれば生徒の理解がより深まったのではないかというご指摘もいただいた。

昨今は情報リテラシーの確立が急務とされており、自分の求める情報を探し、正しい情報かどうかを確かめ、その情報を適切に利用する能力を教育現場でも育てていかなければならない。全体を通じ、その入門として適切な授業だったという評価をいただいた。

(8) 生徒の感想

授業後に寄せられた生徒の主な感想は以下のとおりである。

- ・新聞社により社説に書かれている意見が違うことが確認でき、意義深い授業だった。新聞には小学生の作文などもあり、盛りだくさんな内容で楽しめた。
- ・新聞とテレビなどのマスメディアごとの情報の扱い方が違うことがわかった。
- ・新聞について改めてしっかり読むと、いろんな考えが載っており、興味がわいた。
- ・普段新聞は全く見ないが、もう高校生になったので、これを機に少しずつ新聞やニュースをみて政治を学ぼうと思った。
- ・新聞を読む機会はなかなかなかったが、町長選など身近な話題が載っていることが改めてわかった。

5 成果と課題

4ヶ月間の活動であったが、各学年の活動を通じて生徒は少しずつ新聞を読むことに親しみ始めたという印象である。休み時間に生徒同士で新聞を開いて眺めている場面も見られ、教師も授業の導入などに新聞を利用することができた。

自発的に新聞を開かない生徒も、課題として様々な新聞記事を読むことで現代の社会問題や様々な考え方に触れ、見識を広めることができたと思う。

各学年の日常的な活動以外でも、地理歴史・公民科や家庭科では授業で新聞記事を読ませ感想を書かせる授業を行った。自分達に深く関わってくる労働問題や児童虐待の問題を紹介すると、生徒達は学校でニュースに関した授業をもっと取り入れて欲しい、学校はこういった実際的な問題をもっと扱って欲しいという感想を寄せた。生徒がNIEを通じて社会問題やニュースの見識を深めることができたという点が、今年度の活動の成果と考えられる。

一方、学年ごとの活動においては新聞を読むと同時に自分の考えを表現する力の育成を目指したが、生徒の表現力を大きく成長させるという部分には至らなかった。これについては、次年度も発達段階や進路にあわせて活動を工夫していく必要がある。

高校生は、卒業後進学して学生を続けたとしても、もう「一人前」の大人として扱われる。今までは他人事であった社会問題が、自分に関わってくることも実際に起こりえる。その意味において、NIE実践の狙いとしてあげた「社会で現在起こっていることについて幅広い関心を持つ」ことを、ますます充実させていきたい。